

思 い 返 し て

1年 富田 晃 次

これまでの私の、物の見方の反省から入ってみたい。最近大学生活に於いて私の一つの問いかけは、知識とは何かということである。知識の客観的厳密性の要求と、書物、マスコミによるその膨大な量産、そしてそれにもなう商品化がいわれている。そこで得られたものに対しての権威の喪失、それ以上にそれらを摂取する自分の能力への自信喪失である。というのも、古いと笑われるかもしれないが、これまでの私は道学的学問世界こそ、学問の基だと心得、そこに、言葉への又教えへの信仰といったものを求めていた。

学び知ることによって、精神的経験の場を持ち、それによって自らを高め修養するという、儒教的楽天主義があった。あるいは、記憶中心の受験型の思考が自然と禍いして、与えられたものの無批判な摂取、さらにその得たものにしがみつこうとする、停滞的な認識操作を繰り返していたことと思える。確かに、学び知る対象と自己とのかかわりを探求し、意義づけるという哲学の姿勢は、日々様々な意志決定を迫られる私達にとって、価値判断の基準を得るためにも、大切なことであろう。

ただ私の場合には、それ以前の、自己満足された道学的知識のわくに、すべてのものを無理やりに押し込めて、対象そのものの矮小化と、自分自身の精神的発展を、はばむことに懸命になっていたようであ

る。そして、それは、道を求めるという精神的雰囲気から酔って“故人の跡を求めず、古人の求めたところを求める”という、積極的な、認識行為の厳しい練磨を自らに、課すことを忘れていたのである。この根本的な解決は、極端になるが、少なくとも今の私にとっては、ウェーバーの、「即物性」という、対象への無心なる献身の、仕事としての自覚以外にないように思える。それが逆説的に、かえって自己を主体とした認識行為をより正しく、深くしてゆくのかかもしれない。

歴史社会を学ぶ私にとって、総合的・正確な物の見方は不可欠である。自己対象化としての仕事に、知識の世界を選んだ自分のなくてはならない誠実さのためにも。特に歴史は、与えられた、言葉と遺物、すなわち形象の解釈である。材料の少なさは、無数の解釈と想像を呼び起こすことは避けがたい。科学に於る最も、客観性を導びくことが難しい部門である。むしろ、歴史の解釈に、想像は重きを置くが、それをより確かに生かすためにも、対象を選び、関連付け、因果関係を導びき出す、認識の作業段階の、客観的厳密性が大切であろう。

以上まとまりのない文章になったが、これからの大学生活の私の心構えとしておきたい。

逃

避

情報行動科学コース2年 岩田尚文

夕暮れ ラッシュアワー 人の波

なぜ生きているのか。人間は何のために生存しているのか。せいぜい七十年の命を何に費そうというのか。廃退的思想の始まり。

際限なく続く、醜い争い、^{だま}騙し合い。人間は欲の塊。全てをお金という尺度で価値づけようとし、お金さえあれば全ての事が解決できると信じている。そして法律はそれを正当化する。つまり考えるのは自分の事だけ、自分自身なんだ。富と権力が獲得できれば全ての人を犠牲にしても平気なのだ。

もはや人間社会に耐えられぬ。人間以外の生物に生れ変りたい。そして人間を思い切り嘲笑してみた。人生の落後者。

一体、何をしようというのだ、何をすればいいのだ、何を求めて生きているのだ。愛か？愛なんて異常なものだの代名詞じゃないか。人間の心なんて僅かな事で急になってしまう。心一移り変り易いもの。これが真実なのか。

夜の街 ネオンサイン 酔どれの群

いったい何だというのか。人間は何のために生きているのか。子孫を保持するために？それだけならまだ救いようもあるが。

人間一最も高等な動物。お笑い種^{ぐさ}だ。地球上を支配しているから？支配するという事は破壊するという事なのか。必要以上に他の生物の生命を奪い、必要以上に人間の生命を救おうとする。それが実際は人類の生命を縮める結果になっているという事に少しも気が付かない。

何かと言えば法律を持ち出したがる生物。そして法律のない世界では生きて行けない愚かな生物。それほど信用がないのかい。

人間なんて。全ての罪を人になすりつけようとする。人の不幸を心の底では喜び、人の短所を探し回っては優越感に浸る。人を蹴落としてまでも優位に立つことを望み続ける。自分の短所はできるだけ隠そうと努力する。そして露見することをひどく恐れいつもびくびくしながら生きている。

人間はこんな世界に耐えられず苦し^まぎれに酔っ払

う。ただその時かぎりの安らぎを得るために。

何故こんな事で苦悩しなければならないのか。それが人間に課せられた罰なのか。そして人間であるからには誰も逃れることはできないのか。自業自得というわけなのか。

川縁 暗闇 水面

原始的な海洋の中において自然条件のもとで発生したという生命。そして進化。一般に最も進歩しているといわれる人類。進歩とはいったい何であったのか。過ぎたるは及ばざるが如し。汚染一人間の仕^{わざ}業。そして生命の故郷と考えられる海洋まで。全てが人類の犠牲にされる。そして、それを狭い見によって正当化してしまう。生命に一体どれだけの違いがあろうか。道具がなければ何もすることができなくなってしまった人間。機能的には退歩していたのか。そしてこれからも退歩し続ける。それが人類の運命か。

人間の手で汚染された川。それなのに何と活気に満ちているんだ。^{ああ}嗚呼、何と美しい事か。内に秘めた計り知れない強さがある。静かだけれど心にしみ入る流れの鼓動。落ち着き払っている。嗚呼、何と素晴らしいんだ。底知れぬ力強さ。まるで人間の中の醜さを全て洗い流してくれるようだ。

水の中には別の素晴らしい世界がある。これこそ、探し続けて来た世界、醜さを全て浄化してしまうような世界。この世界なら生きて行けそうだ。人間社会からの逃避。

次の瞬間、水の中へ。水と体は次第に同化していった。あとには何も残らない。

世の中を批判するだけならバカでもできる。批判する事から、何か新しい物を得なければ何にもならない。新しい物を得て前進しなければ、人間としての価値はない。自然は人間をいつでも受け入れてくれるのである。

昨日 今日 明日

安藤 正昭

生命なるものに興味をもって久しいが、ただ漠然と不可思議なるものとしたらえ方しかできなかった。大学4年間広く浅く授業をうけ、まだ何の取っかかりも見つけられなかった。見つけられなかったが由に大学院に進学し、自ら探して勉強をし始めた——ことわっておくが、小生万事にオクテで、この時点ですでに同級生達は博物学の大家らしい風格があった。

修士課程ではシャコ筋肉の細胞内電位を記録し、合わせて各種陽イオンのこの電位に及ぼす影響をみた。この時電気生理学の手法を学ぶ。悪名高い大学粉争にまき込まれ、酒の飲み方を学ぶ。

博士課程は東京大学海洋研究所に行き、ウナギと出会う。ウナギは御存知のように、淡水海水双方に適應でき、産卵のために河より海に降る硬骨魚で、しかも少々手術にも耐える非常に有用な実験材料である。海洋研では魚類の浸透圧調節機構を解明する仕事に従事した。小生高校生の時分より“人間は海水が飲めないのに、海にはたくさん魚がいる。魚は又河にもたくさんいるし、その双方に適應できるものもいるが、これらの魚では何がどのように違っ

ているのか、またそれは人間とどこが違っているのか”という疑問を持っていたので、まさに水を得た魚のように仕事に没頭した。仕事の内容については、内田清一郎著「海洋動物生理」東大出版会編及びJ.W.L. Robinson著「Intestinal Ion Transport」Medical & Technical Pub. Co.を参照されたい。

総合科学部に来てやはり魚類の浸透圧調節機構と合わせて、魚類の行動(回遊も含む)学習機構の解明が主な仕事となろう。がとにかく、常に魚を通して人間をみていきたいと思っている。

皆人間に興味をもっているが、人間を理解するためには種々の方法があり、どれも決め手を欠いている。せっからな近代化された人間には向かないかもしれないが、自分の用いる実験材料を通して、生命及び人間の理解を深めてゆくことが着実でもっとも良い方法の1つだと信じている。

(人間行動研究 助手)



寂しがりやの個人主義

環境科学コース2年 村田 格

僕の帰省先は北陸の小都市である。僕はそこにかつて9年間住んでいた。そこは雪国って感じではない。そりゃあ雪は降るけどみぞれも多いせいとか2月に少し積もるくらいで、他地域と比べて特別寒いとは思わない。僕は富山以北へ行ったことがないんでよくわかんないけど、北陸だったってどこもかしこも雪におおわれるわけじゃないってこと聞いている。

冬、クリスマス前に僕は帰省の途につく。帰省ラッシュを避けるためである。現在、北陸と関西を結ぶ特急はすべて湖西線を利用する。琵琶湖の西を走る高架線路である。高架にしているのは雪のせいで

あると僕は思う。今回、うとうとしていた僕は湖北あたりで寝ぼけまなこを見開いた。「雪だ、」雪なんて北陸の者には珍らしくも何ともないのに、思わず口をついて出た。あたり一面雪一色。故郷には雪がないなんて信じられない。同乗の関西人達が話している。「見イ、ごつつう積もっとるで。北陸やなあ」聞いていた北陸のイメージが実感をもって印象づけられる。まして僕たちは北へ向かうのである。白い世界が強烈な第一印象に続いて連想される。雪のない町は想像しにくい。そして北陸へ来てまた帰る人は、雪のあった光景の方を大事に記憶するだけ

う。出会った「雪のない北陸」は一部の偶然的存在とするかもしれない。報道機関によってまた、世間の人々も知るだろう。北陸から南へ出るには、道路も鉄道も敦賀から湖北にかけての峠を越えるしかない。そこは先ほど述べたように多雪地帯。「北陸線、雪のため不通」という見出しが、TV・新聞を駆ける。北陸は「閉じられた世界」になる。加えて報道機関は一般的通念を大事にする。「雪のある北陸」を見せて、人々のイメージを裏切らない。人々もまた、イメージと実際の一致に満足してコトを終える。反対に北陸の人は「他地域に雪はない」を見て自分たちの位置を納得する。ここに一つの等式が生まれる。北陸は広く、個性ある地域も多くあるけど、それらもすべて埋もられてしまう。決定ノ北陸=雪国。

みながひそひそと喋るのが気になるか、私について来い、勝手に言わせておけ、風が吹こうがびくともせぬ塔のようにどっしりとかまえている。——ダンテ

〇〇は何々だ。けっ。僕が一番嫌いなことは人を定義づけることだ。だから「近ごろの……は」とくる大人たちの類にはそっぽを向きたくなる。僕たち人間はそれぞれいろんな要素を内包してるんだ。それなのに一面的な言葉で総括しようなんて……総合的に(ン?何かとってつけたみたい)とらえろってんだ。でもね、最近みんなを見てるとどうもやりきれないんだ。個性、個性と騒がしい割にはどれも同じように見えるんだ。北陸の町が雪国という名の下に等しく埋もられるみたいに。もしみんなが1個の丸い団子だとしてね、2・3本ツノをたててみろって言ったらね、みんな思い思いにつきたてるだろう。団子の色もツノの角度もまちまちだけど、外から見た分には大差がないんだ。ま、そんな感じ。強烈な個性・ユニークさを持っている人はみんなも好きだろうしなりたくもあると思う。だけどみんな他と似たことしたがるね。〈群れ〉から脱落しちゃ生きていけない、なんてのは言い過ぎだろうけど、そういうムードがあるとも聞く。活動と合理的思考の拡大と反比例して心の交流範囲が狭くなってきたのかな。僕もそうだけど、寂しがりやなんだね、現代っ子は。

馬で行くことも、車で行くことも、ふたりで行くことも、三人で行くこともできる。だが、最

後の一步は、自分ひとりで歩かねばならない。

——ヘッセ

でも、結局のところ自分ひとりなんだし、自分の心が満たされるように行動すると思う。だから、大事なことは、互いの個性を育てるために、人それぞれの人格を大切にすることだ。僕なんか人一倍自分を大切に、(他はどうあれ)自分のためによかれ、と行動しちゃう方だけど、それでも他人の人格を認めているつもりである。それは、自分という個人を愛する以上、他人という個人も愛すべきである、と考えているからだ。個人主義は、自分やその属する集団だけへの愛=利己主義とは全く異なると思う。個人主義は人の個性・人格を重視し、人の開放的な和を認めると思う。寂しがりやは愛を求めてやまない。でも求めるだけではいけない。寂しがりやの僕は、最近、愛さずに愛されようとする失礼な態度をとってしまった。全く身勝手な愛である。よく雑誌なんかで、「異性に好かれるには…」なんてあるけど、この頃僕はこう思う。自分のして欲しいと思ってることをしてあげればいいと。愛されたいならまず愛することだと。



個人主義は、人格における完全な平等を唱えているように見える。寂しがりやは愛の他にやさしさも求める。でも、一番やさしさを知っているのは寂しがりやのはず。やさしさには包みこむやさしさと突き放すやさしさがあって…うん、いや、そんなことはどうでもいいこと。最近、やさしさが求められるのは寂しがりやが増えたせい? そうなら期待できる